

# 都市国家における心象風景

——シンガポールの都市再開発にみるポストコロニアル・ナショナリズム——

奥村みさ

## はじめに

植民地から独立した多くの国家では植民地時代の建造物を解体する傾向があるのに対して、シンガポールでは植民地時代のシンボルともいえるべき建造物や施設をむしろナショナル・モニュメントとして修復・保存する政策をとっている。それはなぜか。

そこにはシンガポールにおける独立後のナショナリズムのあり方が垣間見える。

土屋健治は、ナショナリズムと国民が抱く心象風景とは密接にかかわっており、ふるさとの里山の風景が国民の心象風景を形成している、という。心象風景へのノスタルジアが多民族国家をひとつの共同体に纏め上げている、というのである。彼はインドネシアの風景画を手がかりにインドネシアのナショナリズムの夜明けを「カルティニの風景」という形で読み解いて見せた（土屋：1991）。

それでは里山を持たない、都市国家シンガポールに生きる人々にとっての心象風景は何によって構成されているのであろうか。筆者は、それはイギリス植民地統治時代の街並みであると考え、人々が過去に抱くノスタルジアを代表しているのが19世紀から20世紀前半に建てられた建物なのであり、それゆえ、シンガポール政府は植民地時代の街並みを独立後もナショナリズムの象徴として保存しようとしているのではないか。

政治的独立は必ずしも文化的分断を意味しないことが、シンガポールのポストコロニアル・ナショナリズムの特徴である、と筆者は考える。つまりはシンガポールのポストコロニアリズムは文化的連続性の上に成立しているのである。

本論の第1章では、シンガポールの都市計画を歴史的に辿る。第2章では、コロニアル文化地域のヴィクトリア・ストリートにあったカトリック女子修道院とその付属学校の再開発問題を事例に取り上げ、政府による文化遺産保存政策と関係者の心象風景としてのその土地へのノスタルジアのすれ違いについて考察する。そして第3章においては、上記の議論を踏まえ、政府主導型の都市再開発政策の文化的限界について論じたい。

## 1. シンガポールの都市開発政策の変遷

### 1-1. 19世紀イギリス植民地政府による都市計画

現在のシンガポールの成り立ちは自然発生的に形成されてきたものではない。イギリス植民地当局の周到な都市計画の結果である。

1819年1月、この島に上陸したトーマス・スタンフォード・ラッフルズ (Thomas Stamford Raffles 1781-1826) は、さっそくジョホール王国の高官と予備協定を結び、そこに東インド会社の商館を建てる権利を獲得する。これが、英国によるシンガポール支配の始まりとなった。早くも、そのたった3年後の1822年に描かれた都市計画図を見ても、イギリスの「分割統治」が政治機構のみではなく、都市部住民の居住地に対しても実施されていたことがはっきりとわかる (図1)。

19世紀にイギリス植民地政府は、シンガポール河口を中心に、海岸に沿って都市づくりをはじめた。当然、海岸ぞいに植民地政府の中枢機関が集中した。エリザベス・ウォーク、マー・ライオン (2003年に橋の反対側に移転)、聖アンドリュース教会、シティ・ホールなど、現在、観光客が多く訪れるコロニアル風な建物がある地域である。

このコロニアル文化地域に君臨するラッフルズ・ホテルのはず向かいのヴィクトリア・ストリートとブラス・バサ・ロードが交わる地点に、第二章で事例として紹介するカトリック女子修道院幼きイエス会本部 (The Convent of Holy Infant Jesus、以下 CHIJ と略す) と付属学校はまるまる一ブロックを占有していた。道路を隔てると、現在一大ショッピング・センターとなっているラッフルズ・シティがある。

官庁街の北部の水はけの良い土地は西洋人居住区とされた。西洋人居住区を中心に北部はムスリム、南部は華人の居住区と住み分けがなされた。

西洋人居住区の北部のロッシュー川対岸にムスリム居住区が設定され、その北側が漁労を生業とするマレー系のブギス族、南にアラビア人居住区がスルタンの所有地を挟むように設定された。

また、西洋人居住区の南部を流れるシンガポール川の対岸は海岸沿いに商業地が開発され、その西側に中国人居住区、そしてさらに西にインド人居住区が設定された。図1と図2を見ると、独立直前の1950年代でも、ラッフルズが上陸した直後と変わらぬゾーニングが継続して実施されていたことがわかる。

この植民地政府によるゾーニングがのちに独立後、異なる民族どうしが「シンガポール人」としてのナショナル・アイデンティティ共有への阻害要因のひとつとなったのである。

### 1-2. シンガポール政府による都市再開発政策

シンガポールの都市再開発政策には三つの目的がある。第一は土地不足の解消、第二は外国企業や観光客を誘致するためのインフラの整備や文化財の修復、そして第三の理由が国民統合のための愛郷心の育成である。

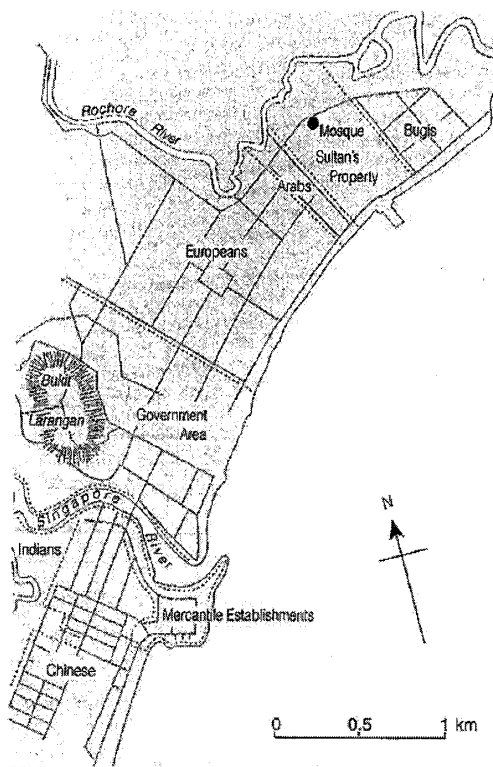
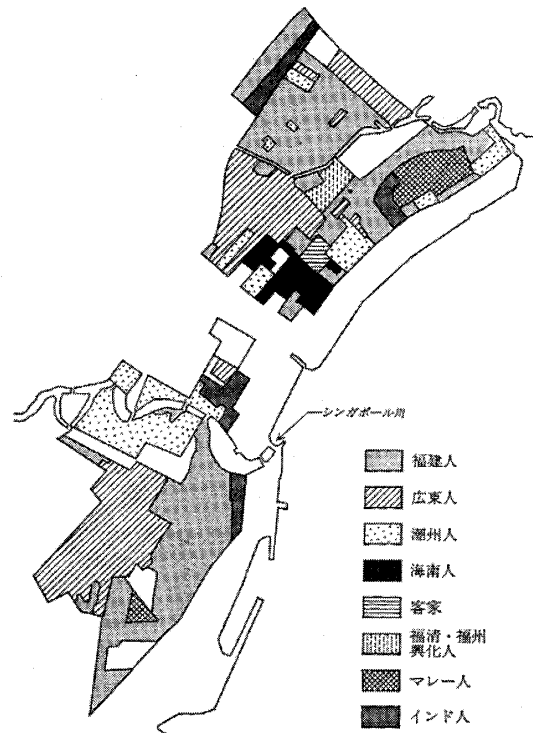


fig. 2 Raffles' 1822 planned layout for the city centre.

図1 ラッフルズによる1822年の都市中心計画図 (Yeoh and Kong, 1995: 30)



1950年代初め頃のシンガポール市街地における住み分け (B. W. Hodderによる)

図2 1950年代初頭のシンガポール市街地における住み分け (可児, 1985: 71)

独立直後における都市再開発政策は都市のスラム一掃がその中心であった。もうひとつの中心となったのは、植民地政府によるゾーニングを崩すことであった。植民地政府による「住宅信託組合 (SIT)」に代わって「住宅開発庁 (HDB)」が設立され、スラム街の一掃と連動して郊外のニュータウン建設に取り組むことになる。住民の HDB フラット (公営高層住宅) への入居を積極的に奨励し、異なる民族がひとつの建物の中で生活するようにしたことはその典型的事業である<sup>1)</sup>。

シンガポール政府は、しかし、旧西洋人居住区はそのままコロニアル文化地域として指定し、文化保存と商業活性化の名目で再開発を推進してきた (図3)。HDB のなかの都市再開発部 (Urban Renewal Department=URD) はその後 1974 年には分離独立し、都市再開発事業団 (Urban Redevelopment Authority=URA) として、国の「ガーデン・シティ構想」のもとに市街地内のオフィス街、中心街、店舗、住宅建設、都心部のスラム・クリアランスにあたることになった (矢延、1983: 142)。その業務には、再開発の一部でもある建築学上、あるいは歴史的意味をもつビルの復旧や保存の任にあたることも含まれている。

80 年代から 90 年代になると、シンガポールにおいては愛郷心を前面に出した政策が目立ち始める。文化財保護や伝統文化 (伝統舞踊や民族料理など) を紹介するイベントや出版などが相次いでいるが、目立つのは National History Board 主導によるオーラル・

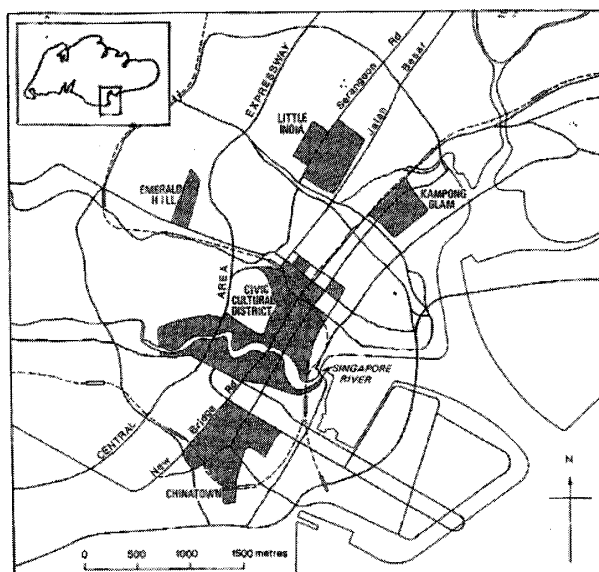


Figure 1. Conservation areas in the Central Area, Singapore.

図3 シンガポール政府による中心部の保存計画  
(Kong and Teoh, 1994:250)

ヒストリーの採取やセピア色のポスト・カード集の刊行など、独立以前の歴史に注目が集まっている。

そしてその時期から、都市政策も都市の歴史的地域の保存が政策の中心となってくる。1971年の早期からナショナル・モニュメントの指定が始まったが、90年代からはその数がさらに増加している。

政府の文化遺産保存政策は、まずコロニアル文化地域で実施された。そのなかでも最初に着手されたラッフルズ・シティとラッフルズ・ホテルは共に賛否両論を巻き起こしながら、修復、改築がなされてきた。ラッフルズ・シティの敷地には、かつてリー・クアン・ユーも学んだシンガポール最古の学校、ラッフルズ・インスティテューションが建っていた(図4)。1835年に設立された学校は、150年後の1985年、中国系アメリカ人 I. M. ペイ氏設計のショッピングセンターに生まれ変わった。実はこれがその後、繰り返されることとなる、建造物の保存か、刷新かの議論の発端となったのである。

ラッフルズ・ホテルは1819年にシンガポールではじめての高級ホテルとして営業を開始した。1989-91年の改装期間を経て、博物館とラッフルズ・ブランドを併設し、コロニアル文化へのノスタルジアを満載したより豪華なホテルに生まれ変わった。

ビクトリア・ストリートの CHIJ は、このコロニアル・トライアングルの最後の一角だったわけである。再開発の対象となるのは時間の問題であった。

### 1.3. 「ふるさとシンガポール」の創出

多言語、多文化状況にあるシンガポール人が共通の国民認識を持つたせるためには、共通の空間認識に訴えることがひとつの方法として有効である。すなわち、シンガポー

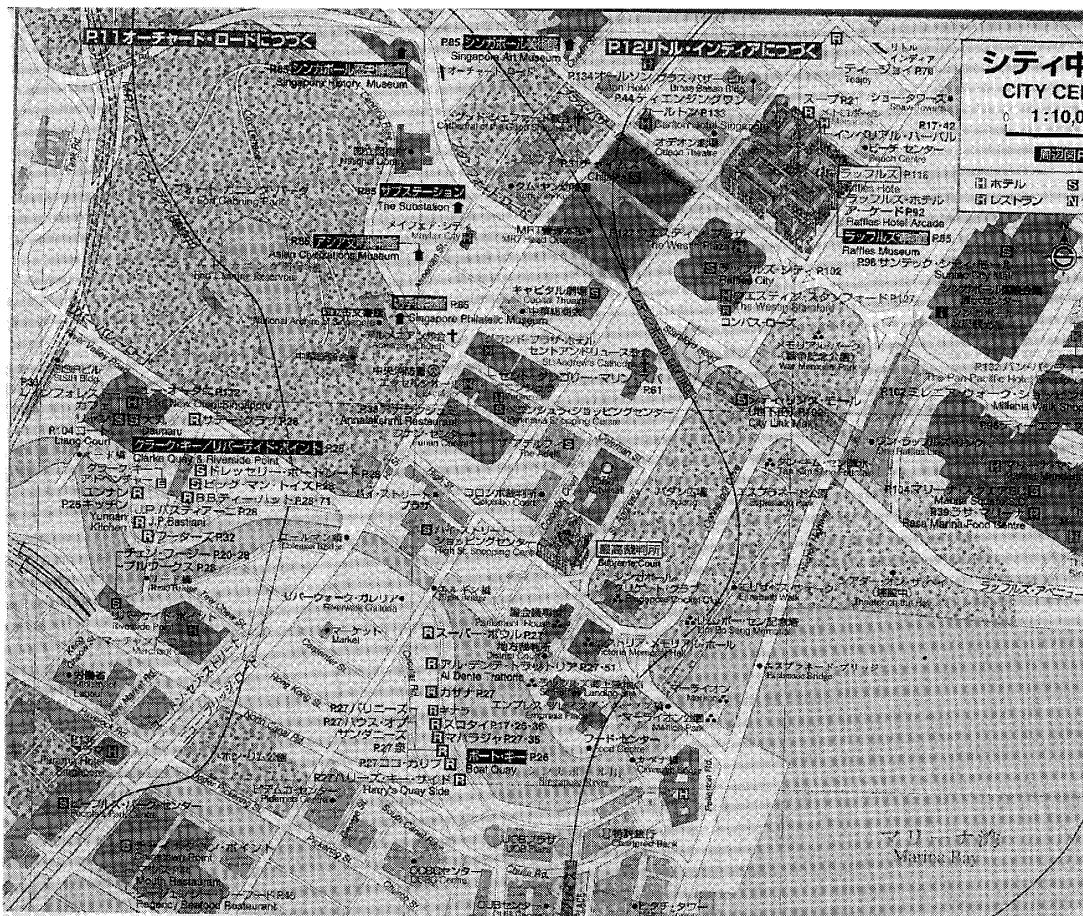


図4 コロニアル文化地域における CHIJMES の位置  
 (『わがまま歩きシンガポール』ブルーガイド社)

ルという国土を愛すること、愛郷心の強化が重要な問題となる。

シンガポールが愛郷心を問題にする理由として、第一に地政学的理由がある。マレー世界の小島であるシンガポールは毎年、軍事予算の20%強を支出しているほど国防が重要視されている。国防のために愛郷心を必要としていることは理解できる。

しかし、愛郷心の問題が、ここにきてとみに注目されるのには、もうひとつの重要な理由がある。それは人口学的理由である。シンガポールにおいては頭脳流出が増加傾向にあることと平行して、外国人人口が増加し、現在人口の約20%が外国籍である。特に、外国人の未熟練労働者人口が増加している。そこで、シンガポール人の流出を食い止めるためにも、愛郷心の育成強化によって「ふるさと」を創出しようとしているのである。

現在のシンガポール社会が抱える最も重要な問題の一つは、第三世代の間で海外移住者が増加しているということである。

2002年8月9日、シンガポールの第37回独立記念日におけるゴ・チョクトン首相の演説には驚かされた。"Are you a stayer or quitter? あなたたちは国に止まるのか、あきらめる(海外移住する)のか"と国民に呼びかけたのである。しかもこの英語には

二重の意味があって、「あなたたちは忍耐強い人間か、それとも臆病者か」という掛詞でもある。ゴーク首相はただ単に、居住地の選択を問うたのではなく、国民の国に対する忠誠心を問題にしたのであった。

現在、ある程度豊かな経済状況を楽しんでいる諸国家のなかで、しかもシンガポールはアジアで日本に次ぐ第二位の GDP を誇っているというのに、国民に対してこのように問う首相が他にいるのだろうか。ゴーク首相の演説は期せずして、シンガポールにおいては優秀な人材の海外頭脳流出が如何に深刻化しているのかを如実に表す結果となった。

資源の少ないシンガポールは人的資源の育成に国を挙げて取り組んでいる。シンガポールの熾烈な受験戦争は日本の比ではなく、広く知られるところである。しかし、国策で育て上げたエリート達が必ずしも、シンガポールに止まるとは限らない。欧米の英語圏で学位を取ったエリート達のなかには、条件が良ければ海外で就職し、定住してしまう人も多い。実際、そのような人々は増加傾向にある。1984年には5,040人、1988年には11,770人以上が海外へ移住した(田村、2000:256)。この数字は年を追う毎に増加しており、現在は2万人以上と言われる。

シンガポール人にはシンガポールを「故郷」とする意識、ナショナリズムが薄いと言われている。「落地正根」とは華僑が移住した地に根を生やし、その地で生きていくことを示した言葉である。多くのシンガポール華人が華僑の子孫であることを考えれば、シンガポールもまた彼らにとって一時的な仮住まいの土地であって、そこからまた移住していくことは「華僑」の伝統にかなった行為、といえなくもない。

しかし、たとえば、マレーシアやインドネシアの華人の多くが、それらの地を「故郷」と認識し、イスラーム文化が優勢な土地にもかかわらず、海外留学を終えた後はマレーシアやインドネシアにもどっていることを考えるとき、シンガポールの頭脳流失傾向は突出している。特に、第三世代の海外移住者の増加が著しい。

その第一の要因として考えられるのは、彼らが英語に堪能なことである。英語を公用語にし、教育媒体としていることから、シンガポール人は欧米英語圏文化になじみ、それらの国へ留学する人々も多く、移民することに抵抗が少ないからなのではないだろうか。

英語を公用語にしてきたことで急速な経済発展を遂げてきたシンガポールだが、英語によって生活世界が形成されてしまい、物理的にはシンガポールに居住していながら、ライフスタイルは英語圏文化に属しているというアイデンティティのねじれ現象が生まれている。

第二に、後背地を持たない都市国家であることも人口流出の大きな要因であろう。たとえば、現在シンガポールのライバルとなるべく急成長を続けているチャイニーズによって形成されている都市、たとえば、香港、北京、上海、台北、と比較してみると不利は明らかである。

これらの都市は昼間人口が夜間人口を超え、都市中心から郊外へ人口が移動するというドーナツ化現象が将来進むとしても、郊外となるべき土地が回りに控えている。また、

都市生活を支える後背地がある。しかし、シンガポールにはその土地が十分でない。それゆえ、よりよい生活を求めて英語が堪能なエリート層が海外に出て行ってしまふ。そこで、何とか人々をシンガポールという土地、空間につなぎとめる動機付けが必要となってくる。それが愛郷心であり、心象風景の共有意識である。

第二章では象徴的な事例として、市内の中心部にあった修道院 CHIJ が現在はチャイムス CHIJMES というナショナル・モニュメントでありかつ商業施設に変身した経緯を紹介しながら、政府の愛郷心を目的とした「文化遺産」修復・保存政策が、その実施過程でなぜ当事者たちの反対運動にいたったのか、について分析する。

## 2. ノスタルジア 対 文化遺産

### 2-1. 幼きイエス会修道院 (CHIJ) から、チャイムス (CHIJMES) へ

シンガポールのコロニアル文化地域の中心部に位置するチャイムスは、現在、おしゃれな "Shopping, Wining and Dining Spot" として知られている。

そこは、観光客のみでなく、地元の若者がレストランやバーに來たり、ギャラリーや雑貨を見に來たりでにぎわっている。日曜日には瀟洒なチャペルで結婚式をあげるカップルも多い。ある日本のガイドブックには次のように紹介されている。

大人のムードを満喫したいなら、ゼツタイここ、と地元の OL が太鼓判を押すのはチャイムスだ。

私立の「お嬢様学校」だったという石造りの建物の概観をそのまま使っており、地下と1階にレストランやブティックなどがいろいろは行っているのだが、チャペルまであるせい、この一角はヨーロッパ的。華やかでエレガントな雰囲気がある。大人のカップルが多いのもうなずけるといふものだ (ブルーガイド、1997: 210)。

美しい中庭を持つ、このコロニアル風の建物がかつて、実は幼きイエス会の本部修道院であったことを知る観光客は少ない。だが、地元の人々には「ヴィクトリア・ストリートの修道院」としてよく知られたランドマークだった。CHIJMES とは幼きイエス会の略である CHIJ に MES を加えたアクリムであり、ネーミングにも名残りを残そうとした工夫が見られる (CHIJMES パンフレット、1997: 1)。また「チャイムス」という読みせ方は、教会の鐘の音をイメージしているそうである (写真 1)。

1852 年、フランスから幼きイエス会の修道女 5 人がペナン島に上陸した。シンガポールで活動を開始したのは 1854 年であった。この敷地にあるコードウェル・ハウスを富豪から譲り受け、2 クラス 14 人の生徒、9 人の寄宿生、16 人の孤児を教育することから活動は始まった (Kong, Low & Yip, 1994: 45) (写真 2、3)。

1662 年にフランスで設立された幼きイエス会の活動も、孤児の世話から始まった。日本では現在全国 5 カ所に小・中・高校を持つ雙葉学園を運営し、通称「サン・モール会」として知られている同会が、1872 年、横浜に上陸して始めたのがやはり孤児院で

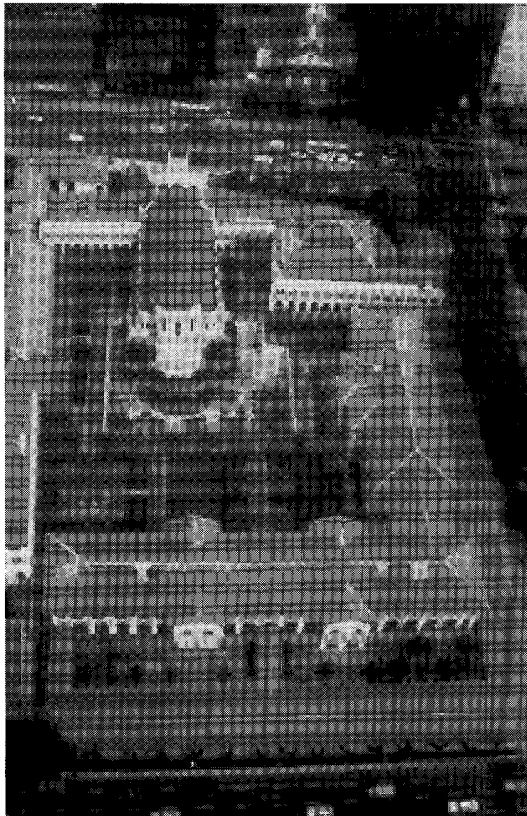


写真1 現在の CHIJMES  
(CHIJMES ホームページより)

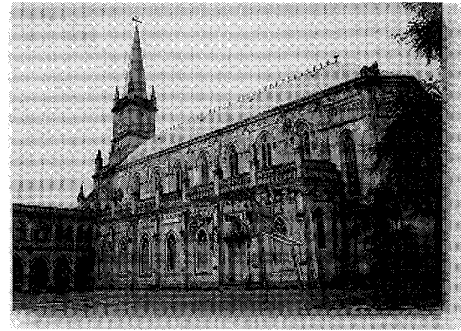


写真2 改築前の修道院の聖堂  
(CHIJMES ホームページより)

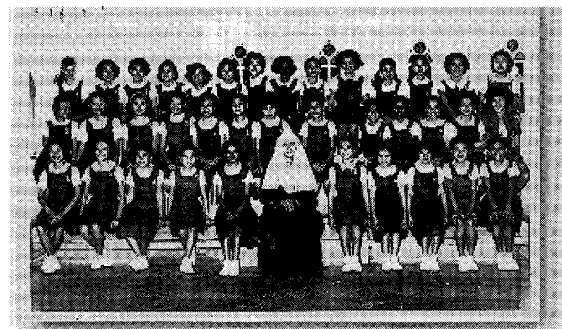


写真3 修道女と生徒たち  
(CHIJMES ホームページより)

あった。チャイムスでは外壁に今でも、フランスの修道院にあるような捨て子の差し入れ扉が残されていることに、当時のなごりをとどめている。修道女たちと顔を合わせたくない親の多くはその扉の外側にこっそりと子供を置いていったそうである。差し入れ扉は「希望の扉 Gate of Hope」と呼ばれ、現在その横に掲げてある説明文には「シンガポールでは女兒、特に虎年生まれの子が多く捨てられた」、と書いてある。虎年生まれの子は、家に災禍をおよぼすという迷信があったそうである。ただし、捨て子は華人系に限らず、民族も宗教も多様であり、修道女たちはその子供たちを分け隔てなく、すべて受け入れたそうである。

修道女達は事業の拡大とともに西洋の信徒からの寄付金で建物を増築していった。この敷地では、最盛期に200人もの修道女が生活し、孤児院、寄宿舎、女子高を運営していた。学校は100年間に6万人もの卒業生を輩出し、修道院の学校はシンガポール全土で、現在11校までになった。本部の修道院では、1982年まで外国人の修道女が院長を勤めていた。

現在は、かつての院長室はギャラリーに、洗濯場はしゃれたカフェに、というように改装された。1920年に建立された修道院のチャペルは非聖化された後、入口をガラス張りにし、冷房が完備され、内装はフランス風の飾り付けが施されて多目的ホールとして模様替えされた。



それではなぜ、修道院がデート・スポットに変身してしまったのか。それは、修道院の立地と政府の都市計画が大いに関係している。

## 2-2. 修道院移転と建物の修復・保存問題

シンガポールの狭い国土をいかに有効利用するか、は政府の最大の関心事のひとつであり、国土計画のなかに国民の住環境整備は大きな位置をしめる。一群の HDB フラットとその近隣のコミュニティには、必ずモスク、教会、寺院などの祈りの場が設けられた。雑貨店や、歯医者が必要設置を義務づけられているのと同様に、生活必需施設として認識されているからである。

政府の再開発政策で移転の対象になった建物に共通するのは、植民地時代からの歴史的建造物であり、都心部に位置している点である。そして、移転させられた建造物のうち、キリスト教関係の建物も少なくない。幼きイエス会以外の他の幾つかの修道会も移転させられた。都心部から修道院や教会を郊外へと移転させた第一の目的は、先に記したように、郊外に建設された HDB フラットと近隣のコミュニティの住民の精神的ニーズを満たすため、ということであった。ある意味では都市化による喧噪を避け、静かな郊外に移るのは聖職者達の生活にとっても良いことであろう。しかし、移転場所の選択など、シンガポールの都市再開発の決定権はすべて国が握っており、まるでチェスの駒を動かすように、様々な建物を移転、新築してきた。

多くの建物が整理、移転される過程で、なかでも幼きイエス会本部の移転と建物の修復・保存の問題は特に注目を集めた。その存在はまさしく、植民地時代の文化的象徴であったからである。

まず第一にその立地条件である。その敷地が広大だったというだけでなく、それがコロニアル地区の中心に位置していることであった。

第二に「修道院」という、西洋のキリスト教精神文化活動の中心であったことである。しかも、シンガポールの女子教育が草創された土地であり、1852年から約130年に渡ってシンガポールの女子教育の歴史を体現してきた建物であった。事実、1983年にその歴史を閉じるまで、この建物は、特にシンガポール・マレーシア地域の植民地時代の教育に多大な影響を及ぼしてきた幼きイエス会の修道院学校のうちで、設立当時のままの姿で機能してきたアジアで唯一の学校であった。その処遇を巡っては、学校関係者以外にも様々な議論が巻き起こった。この反対運動については3-1で詳細を述べる。

反対運動に対する政府の姿勢は以下のようなものであった<sup>2</sup>。

「修道院はもはやひとり修道会のものではなく、シンガポール国民全体の歴史的建造物である。修道会には老朽化した建物を改修する費用はないだろうし、修道女の数も少なくなってきたので現在の修道院を維持するのは重荷であろう。しかも、その土地は植民者（イギリス人）が占領し一方的に私有地と宣言した土地にすぎないのであり、元来の所有権はシンガポール人のものであった。それを今回、正統な所有者に取り戻したのである。」

政府は当初、地下鉄事務所を作るために、敷地の一部の提供を要求した。その後、1983年末までに、修道院に対して当時居住していた40人の修道女は、すべての敷地から立ち退き、修道院と学校を郊外に移転することを命じた。URAは都市再開発計画の一環としての「住みかえ」政策つまり「建物には建物を」という保障の仕方、アン・モ・キオに新しい修道院を、ブキッ・ティマに新しい学校の建物を新築することを約束した。ただし、それまで修道院が所有していた4エーカー（16,187平方メートル）にのぼる広大な土地に対する対価は支払われず、また郊外に新築された修道院と学校が建っている土地は99年の租借という形の移転であった。

注目すべきは、土地を接収してからの政府の処置である。政府はこの地域を再開発重要地域のひとつとみなし、この時点で既に、修道院の建物も修復し、保存することを考えていた。ただし、この修道院の場合は税金で建物を修復することはせず、敷地を建造物ごと私企業に売りに出したのだ。ただし、政府は売却にあたり建物の修復と保存を条件とし、内部の利用法も「もともとの土地使用法から、大きくはずれないこと」とした（写真4）。

政府は結局、無償で入手した土地をチャイムス社に売却し、膨大な利益を得たのである。面目躍如ともいふべきみごとな錬金術といわねばなるまい。売却後、1991年から1996年の修復期間を経て、チャイムスは1997年から営業をはじめ、すでにここで結婚



写真4 修復作業風景

(CHIJMES ホームページより)

式をあげた流行に敏感な日本人カップルもいる、というほどの観光名所となった。

### 2-3. ナショナル・モニュメント

このいわば、政府による土地転がしとも言われかねない荒っぽい都市再開発には、しかし、ある興味深い政府の思惑が見て取れる。それは、ナショナル・モニュメントの保存という姿勢である。CHIJMES は売却される以前、1990年にモニュメントに指定された。

モニュメント保存法が実施されたのは、1971年からであった。「保存の目的は、これらのモニュメントを不朽の記念碑として保護することである。なぜならば、これらの建造物は過去へとつながる重要な絆を提供しているからである。」<sup>3)</sup>

文化遺産保存政策の中でもナショナル・モニュメントの指定については特筆すべきである。1971年の早期から指定が始まったが、90年代からその数が増加している。

2003年現在、モニュメントに指定されている47棟の建造物のうち24棟がモスク・寺院・教会等の宗教関係施設である。その内訳は、キリスト教会8棟、華人系宗教寺院6棟、モスク5棟、ヒンドゥー寺院3棟、シナゴグ2棟となっている。このように、モニュメントの選定にもマイノリティへの配慮がなされており、それによって、多民族社会シンガポールのナショナル・アイデンティティを代表させようとしている。

これらに華人系ゆかりの歴史的建造物6棟を加えると、シンガポール多文化社会を代表する建造物が、モニュメントの6割を占める。それ以外の4割18棟は植民地時代の政府機関や文化的中心であった建造物である (Singapore 2003, 1999: 344-345)。

対外的に見るとこの政策は、決して観光客目当てに「多民族文化のテーマ・パーク」としてシンガポールを売り込もうとする単なる商業政策ではない。シンガポールは、地理的にマレー世界のただなかに位置していることから、東西文化の異種混濁を標榜することで、独自色を打ち出し、中国本土の文化との差異化をはかって周囲の状況に配慮するという、文化的安全保障の意味も含まれていると考えられる。

しかし、国民文化の伝統的文化遺産と指定されたモニュメントのリストを見ると興味深い点に気がつく。この保存法に基づき政府が保存・修復してきたのは、宗教的建造物を除外すると主として植民地時代の為政者や富豪の西洋式建造物であった。

旧植民地における文化的ポスト・コロニアリズムが、宗主国からの文化的独立を標榜するのであれば、これらの建造物は真っ先に排除されてしかるべきものであるはずであった。では、なぜ政府はこれらの建造物を壊さなかったのか。壊さないどころか、これらのイギリス統治時代の遺物ともいうべき、西洋様式の建造物をモニュメントとして保存することにしたのか。それは建造物を国民文化の伝統的遺産として意味を認めているからである。

つまり、それらの建物を植民地時代の政治権力の象徴としてというよりも、かつての自国の支配階級の文化、伝統的ハイ・カルチャーの一部としてみているからではないか。イギリス文化を外来の文化としてよりも、「内発的な」上流階級の文化として扱ってい

るといまいか。それは、たとえば、ラッフルズホテルの改装が、オリジナルよりもさらにコロニアルらしく、幻想のオクシデンタリズムを具現化したことにも現れている。冷房のよく効いたライターズ・バーの天井でまわっている扇風機はもはや実用的意味はなく、いっそうのノスタルジアを醸し出すための舞台装置として機能しているのである。

逆に、むしろ本来「伝統的」建造物とみなされるべき、庶民が暮らしていたショップ・ハウスやプラナカン（海峡華人）様式の建物は朽ちて行くまま放置されていた。

人々によれば、シンガポールの真に内発的な建物はこのショップ・ハウスであり、ショップ・ハウスのなかでも「伝統的」なのは主に1890年から1940年代に建てられたものだそうである。

しかし、独立後の経済成長とともに、都市中心部再開発のため数多くの植民地時代からの建物、ショップ・ハウスが取り壊されてきた。

ショップ・ハウスに対する本格的な保存の声が高まって来るのは、80年代後半になってからである。たとえば、タンジョン・パガー地域では現在、ショップ・ハウスの修復作業が進行中であり、外壁がパステル・カラーに塗り替えられた建物の内部は、新たにブティックやレストランなどが入居し、新たな商業地区に変貌を遂げようとしている。ただし、これらの建造物は「モニュメント」には指定されていない。

ラッフルズ・ホテルを中心とするコロニアル地区には、47棟のモニュメントのうち16棟すなわち約3割がこの狭い地区に集中している。一般的に旧植民地社会が「伝統文化」を論じるとき排除しようとする、コロニアル文化を、シンガポールは伝統の中心柱のひとつに据え、正統性を与えているのである。ゆえに、政府側には都市計画の中で、なにがなんでも幼きイエス会の敷地を再開発する必然性があったのではないか。

このように見てくると、都心の一等地に建つ、幼きイエス会本部の修復がハコとしての建造物に対してのみ行われたことは、建物は植民地時代の文化遺産としてシンガポールの文化的伝統に組み込むが、修道院の教育活動、布教活動、そして西洋の伝統的精神文化の象徴であるキリスト教は排除する作業、つまり「仏を作り直して、魂を抜く」作業だったとも考えられる。その作業を経て初めてCHIJMESは襖ぎを果たし、「現在の」シンガポールがその伝統文化を語るにふさわしいナショナル・モニュメント、正統な「伝統的」文化的遺産のひとつとして創造されたのである。

しかし、政府が再生して見せたノスタルジアは必ずしも、その土地に生活している人々のノスタルジアを満足させるものとはならなかった。

### 3. 政府主導型都市再開発の限界

#### 3-1. 女子修道院取り壊し反対運動

ノスタルジアとは、「失われたある場所、時代に対する思慕」であるという。それであるなら、その象徴としての建造物は、そこに思い出があるものにとっては、眺めるたびに過去と現在を同時に二重写しにして見せてくれる場所でもある。

だからこそ、CHIJの修道院と学校に対して廃校と移転処置が決定された際、卒業生

たちを中心に反対運動が起こったのであろう。その処遇を巡っては、学校関係者以外からも様々な議論が巻き起こった。

そして、建物修復後の用途に関しても、できるだけ初期のイメージを損なわないように、とOG会有志が政府に嘆願書を出した。

第一の理由は「歴史的建造物」であること。修道院の改築計画が持ち上がった、1983年現在「ビクトリア・ストリートの修道院付属学校」はアジアにおいて、現役の学校として機能している最古の学校建築であった。また、フランスから運ばせたステンドグラスや円柱のレリーフ彫刻など「建造物としての美術的価値」が高い（写真5）。改築時にステンドグラスは保存されたが、レリーフは破壊された。新たに施された装飾は、シンガポール人の左官がシンガポールの動植物、ハイビスカスやトカゲなどをレリーフとしてあしらったが、これを内発的芸術と呼ぶか、稚拙な装飾と呼ぶかは議論が分かれている。

関係者にとってもっとも衝撃を受けたのは、聖堂内部の取り壊しである。祭壇は司祭によって非聖化の儀式が行われた後に崩され撤去された。これは宗教性の撤去という意味合いも持ち、聖堂のアイデンティティを失わせるものであった（写真6）。

第二の理由として、「何千もの卒業生の団結の象徴」であったこと。

私たちは悲しみのときも、喜びのときもいつも、内省するためにそこへいった。私が昨年12月にそこへ言ったときには、学生時代のことが思い出され、さまざまな思いが私のなかを駆け巡った。（The Straits Times, 30 Nov. 1981）

女子学生を修道院学校の建物から排除することはできても、彼女の心の中から修道院学校を排除することはできない。（You can take the girl out of the Convent. But

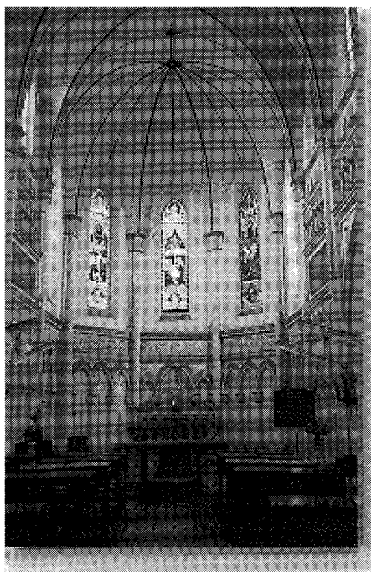
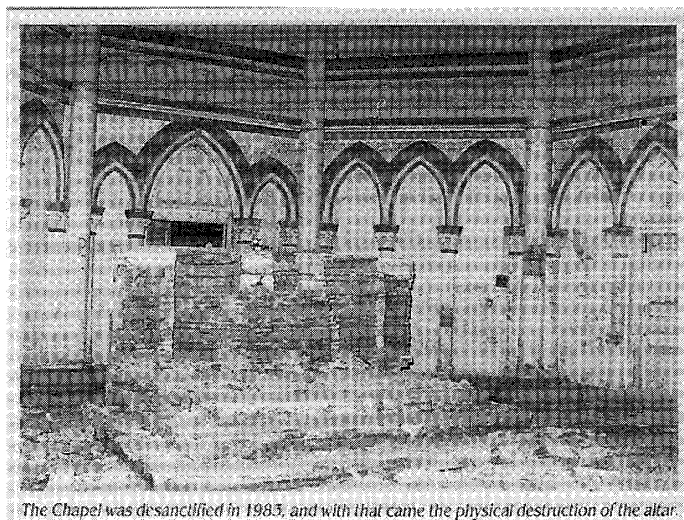


写真5 改築前の聖堂内部  
（CHIJMES ホームページより）



*The Chapel was desanctified in 1983, and with that came the physical destruction of the altar.*

写真6 聖堂の非聖化と解体作業  
（Kong, Low and Yip,1994:171）

you can never take the Convent out of the girl.) (The Straits Times, 1995)

ただ、残念なことにこれは組織化されない未熟な運動であったし、結果としては運動が成功したとはいえない。卒業生たちは新聞投稿や他のメディアを通じて散発的に反対を表明したが、運動としてのまとまりに欠けた。それをまとめようとしたのが、若い17歳の卒業生だったのだが経験不足から効果的な運動に発展しなかった (Kong, Low, Yip, 1994 : 170)。

だが、政府の政策に異を唱えることが少ないシンガポール国民、しかも女性たちが声を上げたことに注目したい。自己形成期を過ごした場所へのノスタルジアが彼女たちを突き動かしたのだろう。

興味深いのは、この学校の関係者ではない、一般人も反対の声を上げたことである。設立当時シンガポールで一番高い尖塔を持つ教会を眺めながら、学校に通う女学生たちのさざめきを聞きながら通勤をしてきた街の人々が、見慣れた風景の一部が取り壊されることへの抵抗感を表明した。

ノスタルジアの力は「静かな国民」を動かすほど強い。しかし、国民のノスタルジアと政府がナショナリズムの根拠として創出しようとしているノスタルジアは必ずしも同一ではなく、多くの場合両者の間には微妙なズレがある。

### 3-2. 場所と記憶の分断による心象風景の破壊

多くのシンガポール人研究者が指摘するのは、政策的なポストコロニアル文化創造は必ずしも成功していない、ということである。観光客向けのオクシデンタリズムが住民にとってはよそよそしく、親しみがもてない、と回答している調査の例もある。

政府が従来の「伝統的」な建物を修復作業のため解体してしまうことが、その土地にまつわる人々の記憶を断絶させてしまい、過去のノスタルジアを再生しようとするその作業がまさしく、心象風景を破壊してしまっているのである。

チャイムスはその後、筆者が2002年2月に訪問したときは、「希望の扉」の位置がすぐにわかったのに、2002年8月に訪れたときにはもう、隣にあった香水店はラクサ(シンガポール風のカレーうどん)が1ドルで食べられるのが売りのコーヒーショップに様変わりし、「扉」の前は店の銀色のスチール製椅子でふさがれている状況となっていた。広々とした中庭の芝生も周辺のレストランからの椅子の「侵食」によってどんどん狭くなっている(写真7)。

チャイムスはショッピングセンターとしては高級志向の観光客を対象として設立されたが、高島屋を有するニー・アン・シティがオーチャード・ロードにオープンしてからは、観光客の流れはオーチャード・ロードにもどってしまい、チャイムスのお店は振るわなくなってしまった。

また、オーチャード・ロードのエメラルド・ヒルの「失敗」も典型的なケースである。1984年政府が最初に修復・保存に取り掛かったエメラルド・ヒルには政府が改装し



写真7 現在の CHIJMES の夜景

(CHIJMES ホームページより)

た色鮮やかな概観のショップハウスがある。そこには「プラナカン・プレイス」と呼ばれる海峡華人の衣食住を紹介した商業施設ができた。

プラナカン・プレイスができた1980年代後半には、1階はパオ（肉まん）やエッグ・タルトなど中華のおやつを売る菓子屋などが入り、2階はニョニャ料理を出すレストランだった。レストランの内装はババ文化の特徴である螺鈿細工を施した家具でそろえ、ウェイトレスもニョニャの伝統的衣装である「クバヤ」を着ていた。プラナカンの結婚式を模したショーも開催されていた。

しかし、このレストランは長続きせず、90年代初めに筆者が再訪した時にはもうジャズ演奏付きのバーに衣替えされていた。エメラルド・ヒルの入口はトロピカル・カクテルを売るアウトドア・カフェで塞がれており、観光客はこのカフェを縦断せずにはエメラルド・ヒルの写真もとれない。

つまり、政府の都市計画のなかでコロニアリズムを演出した官庁地域は、政府が意図したようなオキシデンタリズムに満ちた19世紀の町並みの再生、ノスタルジーを創生することができなかった。ハコだけの修復・保存では人々の心象風景を具現化することはできない。文化は歴史的に継続しているのに、政府は都市再開発政策によって場所と

人々の記憶を分断してしまった。ノスタルジアは、土地に立てられた建物のみによって再生するものではなく、そこでの人々の生活、息使い、たたずまいが重要なのである。たとえば、チャイムスのチャペルは、観光客にとっては植民地時代を思い起こすよすがとなるかもしれないが、関係者にとっては、苦楽を思い巡らした場所ではなくなっている。もはやシンガポールの都市中心部には人々の息遣いが感じられる佇まいは消失しつつあるのである。

シェントン・ウェイのビジネスビルは、外国人設計者による設計であり、シンガポール人の手によるデザインではないことも、よそよそしさを感じさせる。

それに対して、たとえば多民族の文化が混交し、自然発生的にコロニアル文化を育んできたカトンのような地域ではそのハイブリディティこそが独自のシンガポールの内発的文化として、特に50年代のノスタルジックな文化として最近注目を集めている。あるいは、初期のHDBこそがシンガポール人の心のふるさとだと主張するHeartlanderもいる。しかし、いずれの地域も政府により、新しいビルを建設するために古い建物が解体されている現状がある。

## まとめ

以上のようにシンガポールにおける愛郷心の育成政策、ふるさとの創成について都市再開発政策を事例に挙げて議論してきた。この試論からわかることは、生活者のノスタルジアが満足に満たされない限り、上からの政策で愛郷心を育成し、人々の流出を防ぐことは難しそうである。

中国人には強烈な故郷への思いがあるという。中国人には海外に華僑として移民しても、死んだら先祖が眠る中国本土の墓地に入りたい、といった故郷への回帰傾向があるといわれる。シンガポールの都市再開発政策においてはそもそも、場所と記憶を分断させるという政策を立案すること自体が中国文化からの距離を置くということであり、脱中国化を図っていると考えられる。政府の墓地整理政策は華人系宗教儀礼のあり方にまで変化をもたらしているのである。

また、シンガポールを後にして海外へ移住したシンガポール人が故郷を想わないということであれば、それは中国人とは異なるシンガポール人としてのアイデンティティといえるのかもしれない。

しかし同時に、これらのシンガポールに対する愛郷心育成目的の再開発諸事業、文化遺産の修復事業等は、かえって生活者の視点からは見慣れた風景、心象風景を破壊することになり、故郷の喪失をもたらしてしまう、という皮肉な結果をも生み出しているのである。



## 注

- 1 政府のマイノリティへの、特にマレー系への配慮にはきめ細かい物がある。たとえば、エスニック・グループのバランスを大きく変化させないように公営住宅のエスニック・グループの人口比率の尺度が1989年に提示された。公営住宅の各ブロックで、華人系は87%、マレー系は25%、インド系・その他は13%の基準値以内であれば、所有者はだれにでもフラットを売ることができるが、この基準値に達した公営住宅の所有者はこの尺度の適用を受けるためにフラットを転売することはできない。人口比とこの基準値を比較するとマイノリティ、特にマレー系がフラットに入居することを奨励していることがわかる。
- 2 以下、修道院移転の具体的経緯は、主としてシンガポールの幼きイエス会本部 Sisters of the Infant Jesus (CHIJ) での聞き取り調査(1998年2月20日から23日)に基づく。インタビューに主に応じてくれたのは以下の2名である。  
 リー Sr. Mary Agnes Lee 管区長。華人系シンガポール人。  
 ディアドラ修道女 Sr.Deirdre。修道会運営の11校の顧問。アイルランド人。
- 3 モニュメント保存委員会 (Preservation of Monuments Board = PMB) の目標は以下の通りである。
  - a) 歴史的・伝統的・考古学的・建築学的、あるいは芸術的重要性を持つモニュメントを保存する。
  - b) これらのモニュメントの設備を保護し、充実させる。
  - c) これらのモニュメント保護に対する大衆の興味を喚起し、支持を訴える。
  - d) これらのモニュメントに関する全ての記録、文書、統計の保存に対して適切な措置をとる。

*Singapore 1997 (A Review of 1996)*, Ministry of Information and the Arts, p.189.  
*Singapore 1999 (A Review of 1998)*, Ministry of Information and the Arts, p.302-303.

## 参考文献

- Bishop, Ryan, Phillips, John and Wei-wei Yeo (ed.) 2004 *Beyond Description : Singapore Space History*, Routledge, London.
- Can-Seng Ooi, 2002 *Cultural Tourism & Tourism Cultures : the Business of Mediating Experiences in Copenhagen and Singapore*, Copenhagen Business School Press, Denmark.
- CHIJMES パンフレット、1997。
- Hooi Den Huan c ed.), 1999 *Cases in Singapore Hospitality and Tourism Management*, Prentice Hall, Singapore.
- Hunt, Robert, Lee Kam Hing, Roxborough, John (ed.), 1992 *Christianity in Malaysia : A Denominational History*, Pelanduk Publications, Malaysia.
- Kong, Lilly and Yeoh, Brenda S.A., *Urban Conservation in Singapore : A Survey of State Policies and Popular Attitudes*, 'Urban Studies', Vol.31, No.2, 1994 pp.247-265.
- , 2003 *The Politics of landscapes in Singapore : Constructions of "Nation"*, Syracuse University Press, New York.,
- Kong, Lilly, Low Soon Ai & Yip, Jacqueline, 1994 *Convent Chronicles : History of A Pioneer Mission School for Girls in Singapore*, Amour Publishing Pte Ltd., Singapore.

- Singapore 1997 (A Review of 1996)*, Ministry of Information and the Arts.  
*Singapore 1999 (A Review of 1998)*, Ministry of Information and the Arts.  
*Singapore 2003 (A Review of 2002)*, Ministry of Information and the Arts.  
Tan Ern Ser, Brenda S.A. Yeoh & Jennifer Wang, 2001 *Tourism Management and Policy : Perspectives from Singapore*, World Scientific, Singapore.  
Turnbull, C.M., 1989 *A History of Singapore 1819-1988*, second edition, Oxford University Press.  
Wee, C.J.W.-L. (ed.), 2002 *Local Cultures and the "New Asia" : The State, Culture and Capitalism in Southeast Asia*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore.  
Yeoh, Brenda S.A. and Kong, Lilly, 1995 *Portraits of Places : History, Community and Identity in Singapore*, Times Editions Pte. Ltd., Singapore.  
-----, 1996 'The Notion of Place in the Construction of History, Nostalgia and heritage in Singapore', *Singapore Journal of Tropical Geography*, Vol. 17, No.1 : 52-65.
- 大阪市立大学経済研究所編 1987『世界の大都市6 バンコク、クアラルンプル、シンガポール、ジャカルタ』、東京大学出版会。  
可児弘明 1985『旅とトポスの精神史 シンガポール海峡都市の風景』、岩波書店。  
サイレンバーク、ジョン・バートラム・ヴァン著、幸節みゆき訳 1988 『思い出のシンガポール—光の日々と影の日々—』、幻想社。  
田村慶子 2000「9章 シンガポールの開発政治」、大阪市立大学経済研究所監修、『アジアの都市3. クアラルンプル/シンガポール』、日本評論社所収：241-264頁。  
土屋健治 1991『めこん選書2 カルティニの風景』、めこん。  
ブルーガイド海外版出版部編 1997『ブルーガイド わがまま歩き3 シンガポール』、実業之日本社。  
矢延洋泰 1983『小さな国の大きな開発—シンガポールの現代化』、勁草書房。  
レイ・チョウ著、岩崎浩美訳 1997「植民者と植民者のあいだで 1990年代における香港のポスト・コロニアル的自己記述」『ユリイカ』1997年5月号、青土社。

\*本論2章の一部は「シンガポールの都市再開発に見るポスト・コロニアリズム：女子修道院から『CHIJMES』へ」、*Sociology Today*, 第11号、2000、御茶ノ水社会学研究会所収：108-116に初出。

\*本論作成にあたっては、2003年度・2004年度中京大学特定研究助成の交付を受けた。